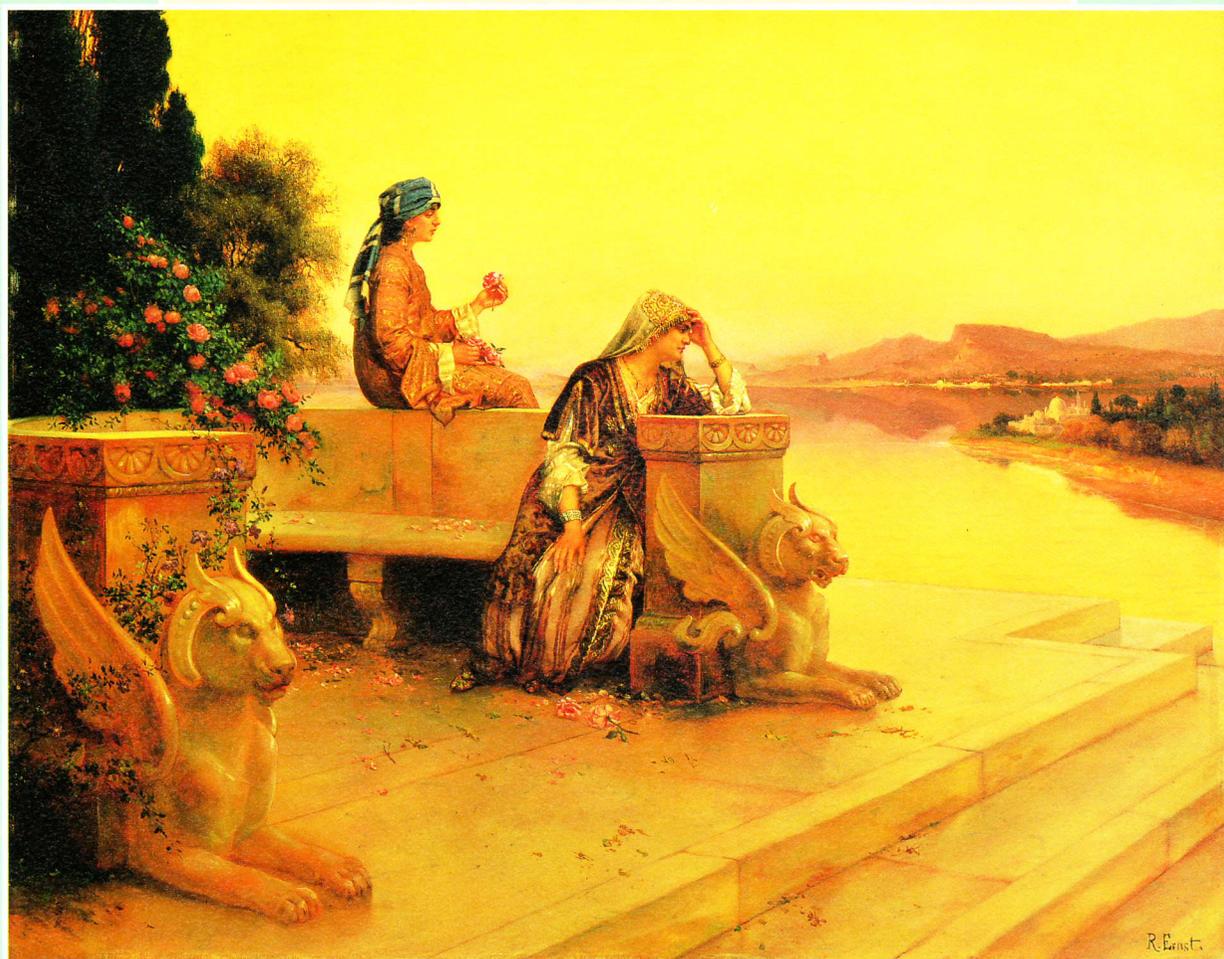


ORIENTALISM



ルードルフ・エルンスト「薔薇のテラスの女たち」

特別展

オリエンタリズムの絵画と写真

主催／渋谷区立松濤美術館 協賛／フジパン・富士カントリーグループ

平成2年10月2日[火]—11月25日[日]

休館日／10月8日(月)・11日(木)・14日(日)・15日(月)・22日(月)・29日(月)
11月5日(月)・6日(火)・11日(日)・13日(火)・19日(月)

開館時間／午前9時～午後5時(ただし、入館は午後4時30分まで)

入館料／一般個人 200円(160円)、小・中学生 100円(80円)

※()内は20人以上の団体割引

※会期中、陳列替えをいたします。

前期：10月2日(火)～11月4日(日) 後期：11月7日(水)～11月25日(日)

渋谷区立松濤美術館

渋谷区松濤2-14-14 TEL.465-9421 渋谷駅下車徒歩15分 神泉駅下車徒歩5分



ラファエル・コラン「輪を持つ少女」



ジュール・トラン「ベニ・アイシにて」



テオドール・フレール「メッカの隊商」



アントニオ・ベアト「カルナクの神殿」



ギョスターフ・ドレ「激流と大鳥」



コンスタン・トロワイヨン「森の散策」



高木由利子「アンナ、バルセロナ」

19世紀の初頭から世紀末にかけてのヨーロッパの芸術家はオリエント（イスラム教文化圏）に対し強い興味を覚え、祈りの情景、オダリスク、アラブの騎士たち、広大な砂漠を行く隊商などオリエント世界への憧れを主題に作品を作りました。いわゆるオリエンタリズム絵画の出現です。この背景には、当時のヨーロッパ列強諸国の政治的、経済的な関心が強く働いていることも事実です。

遙かな異国の地への憧憬を胸に自らオリエントへ旅立ったロマン主義の画家ドラクロワが、北アフリカの光の下で色彩家としての本領を見いだしたことは周知の通りですが、当時の多くの画家が色彩と官能性に充ちた世界を求めて夢のオリエントを訪れ、異国情緒にあふれた作品を描きました。

本展は、東方の風物をテーマとした絵画作品50余点とオリエンタリズムの普及に大きな役割を果たした19世紀の写真60余点、そして、同時代の美術状況の中でのオリエンタリズムを位置付けるために、フランス・アカデミズムの画家たち、印象派に連なる風景画家たちの作品など40余点を陳列いたします。又、併せて、写真部門では、現代の写真家がオリエンタリズムに挑んだ作品30余点を陳列いたします。

■講演会

10月13日(土)午後2時～ 「19世紀フランス絵画とオリエンタリズム」 東京大学教養部教授 阿部良雄

11月3日(祝)午後2時～ 「西洋の鏡の中のオリエント—オリエントの心の旅」
東京大学東洋文化研究所教授 板垣雄三

■美術映画会

10月21日(日)午後2時～ 「ファラオたちの肖像」
「ツタンカーメン黄金幻想」

11月4日(日)午後2時～ 「孤独な虚像・アブシンベル神殿」

■美術相談

「ナイル空間、その終末のとき」

10月28日(日)午後1時～4時 相談員 磯村敏之(洋画)、荒井朝吉(日本画)

11月18日(日)午後1時～4時 相談員 西嶋俊親(洋画)、畑農照雄(版画)

